

# メキシコにおける先住民文学ルネッサンス

吉田 栄人

## 問題の所在

メキシコでは近年、先住民文学ルネッサンスと呼んでもいいほど、先住民言語による文学活動（文学作品の出版だけでなく、コンクールやワークショップの開催なども含む）が活発化している<sup>1</sup>。これはメキシコが多文化国家であることを憲法で規定（2001年）するとともに、先住民言語の使用に対する権利を保障し<sup>2</sup>、かつ先住民言語の復興のための様々な活動に資金援助がなされるようになったことに起因する。ラテンアメリカの文学史において先住民はこれまで表象の対象になりこそすれ、自らがいわゆる文学作品を執筆することはなかった。かつて、ホセ・カルロス・マリアテギ（1928）がインディヘニスモ文学の現状を評して、それはメスティソの文学であって先住民の文学ではないが、いずれしかるべきときに先住民自身が自らについて語る先住民文学の時代がやってくるはずだと述べたが、今まさにその時代がやって来たのである。だが、先住民が自らの言葉で自らについて語る社会的なスペースが開かれたからと言って、即座に先住民が、社会的に優位な立場にある「西洋」の非先住民と同じレベルで自らの声を発し、さらにその声を彼らの声と同次元で聞いてもらえるわけではない。そもそも彼らは何語で書けばいいのか。その意味では、マリアテギが言う意味での十全な先住民文学の時代が来ているとは言えない。それはひとえにいわゆる文学という産業（生産および消費）が西洋の社会的文化的枠組みの中で実践されているからに他ならない。先住民の文学作品は学術的な意味での文学ではあっても、「西洋」の作家の手による文学作品と同一レベルの、読むに値する文学とは必ずしもみなされない（cf. Figueroa 2005）。「西洋」の読者の気まぐれと必要に応じて読まれるだけなのである。

一方で、現在執筆活動を行っているメキシコの先住民作家にはそうした西洋による植民地主義的な、自らの文学に対する差別的扱いや抑圧について自省したり、そうした構造そのものをポストコロニアルな観点から批判しようとする者はほとんどいない。むしろ、彼らの多くは先住民が置かれた植民地的な状況を告発するための政治的な手段として文学を用いようとする。彼らにとって文学は発言の場もしくは機会に過ぎない。その場ないしは機会がそもそも不公平であることは取りあえず問題ではない。それを最大限利用することが当面の課題なのである。一方で、先住民文学が担うそうした政治性に自覚的でない者は先住民性を追求することの内に自らの文学的欲求を満たそうとする。だが、その文学は先住民言語で書き起こされたものではあっても、最終的には「西洋」が用意した概念と枠組みに翻訳され、「西洋」の言説の鑄型に流し込まれることになる。サバルタンたる先住民が声を発してはいても、その実、語っているのは「西洋」なのである。つまるところ、先住民作家が描き出す先住民性は「西洋」が事前に用意したイメージでしかない。そうでなかったとしても、最終的には「西洋」によって回収され、「西洋」が抱くイメージに適合するように編集される。

ラテンアメリカよりも先に先住民文学ルネッサンスが起きたアメリカ合衆国においては先住民

文学のポストコロニアル性をめぐって、先住民作家たちの間で活発な議論が続いている。ポストコロニアルな文学批評の観点から言えば、メキシコにおける現在の先住民文学は周回遅れの文学的実践であると言ってもいいかもしれない。なぜそうした「遅れた」文学が現在のメキシコにおいて実践されているのか、本稿ではその理由を今日の先住民文学がラテンアメリカの文学史の中に占める役割との関係において考えてみよう。

## 1 インディヘニスモ文学の伝統

魔術的リアリズム文学の登場によってラテンアメリカ文学が世界（西洋）の文学に接続するいわゆるラテンアメリカ文学ブームが起きた。このラテンアメリカ文学ブームが起きる以前、ラテンアメリカには文学史上インディヘニスモ（indigenismo）と呼ばれる文学的な伝統が存在した。ペルーにおけるインディヘニスモ文学研究者の第一人者であるアントニオ・コルネホ・ポラールはペルーにおけるブームの作家マリオ・バルガス・リョサの登場を次のように回顧している。

国際的に成功を収め、ペルーの文学界を根底から揺るがすこととなった『都会と犬ども』の出版によって、1964年、国内にはある種の混乱が生じた。（中略）ある意味で、バルガス・リョサの成功は独自の出版システムに基づいて国内文学を展開しようとする努力を封印するものだった。国内文学は国際社会が提起する文学のあり方の前に屈したのである。（Cornejo Polar 1984, p.552）

このコルネホの言葉は、ラテンアメリカにはラテンアメリカの人々の実際の生活に根差した自らのアイデンティティと政治的思想を表現する手段としての確固たるナショナルな文学が存在したこと、しかもペルーにおいてはインディヘニスモ文学がその中心であったことを意味している。これは先住民の存在が国家の政治を左右する重要な問題であったメキシコに関しても同様のことが言える。メキシコの作家カルロス・フエンテスに至っては、ラテンアメリカの小説はその誕生の瞬間から社会を変革する使命を帯びており、ラテンアメリカの小説家は弱者の声を代弁する存在にならざるを得ないと述べている（Fuentes 1980, pp.11-12）。つまり、先住民が存在する国にあって、文学、特に小説は自ずと、何らかの形で先住民の救済を目的としたインディヘニスモ文学を志向することになるのである。

インディヘニスモ文学とは狭義には主として20世紀前半に書かれた、先住民の救済もしくは復権を目的とした文学作品を指すが、その思想的源流は新大陸つまりインディオ（先住民）の発見にまで遡る。ウルグアイの批評家アンヘル・ラマが遺作『文学としての都市』（1984）で述べているように、植民地ラテンアメリカにおいては文字（アルファベット）による文書を使いこなすこと、すなわち識字が権威の源泉であった。この社会的権威としての文字が支配する領域をラマは都市と呼んだのだが、文学とはまさにその都市の中で都市の住民（ブルジョワ）のために書かれる文字そのものであった。そうした都市ブルジョワの文学に先住民が初めて登場するのは先住民を神の摂理と一体化した自然の中で幸福に暮らす人々として描いたフランソワ＝ルネ・ド・シャトーブリアンのロマン主義の登場以降である。白人が人間としての先住民の存在を認知する以前は、先住民は支配者である白人の「文明」社会の外部に位置する「野蛮」とみなされ、あくまで支配の対象もしくは生産の道具でしかなく、白人が自らの社会の葛藤を描く文学的営みにおいて先住民及びその社会が表象の対象となることはなかった。このロマン主義の影響の下、19

世紀のラテンアメリカでは先住民をロマン化して語る、文学史上インディアニスモ (indianismo) と呼ばれる小説がいくつも生み出されることになった。もっともこの時点で表象の対象となる先住民は主としてスペイン人に征服された、あるいは依然として征服に抵抗する先住民であり、植民地支配に従属し、征服以前の「偉大な文明」を失ってしまった先住民ではなかった。あくまで、白人のオリエンタリスト的願望を投影する媒体として「失われた」先住民文化が用いられただけである。失われたと言っても、その実、植民地支配者が破壊したのであり、インディアニスモはレナート・ロサルドが言うところの帝国主義的ノスタルジーの一形態でしかない。

いずれにせよ、文学作品の中での先住民表象は都市 (ciudad letrada) の外に目を向ける行為でもあり、結果としてそれは脅威としての自然に目を開く自然主義文学あるいは地方主義文学、そして先住民が抑圧される社会的機構を批判するインディヘニスモ文学へと展開していくことになる。ただし、植民地支配の下で搾取される先住民に同情し、救いの手を差し伸べるという意味でのインディヘニスモ思想は、いかなる植民地支配下であっても必ず姿を現わすヒューマニズムのひとつであり、ラテンアメリカにおいてもインディアニスモの登場以前から存在した。ラテンアメリカの植民地社会に内在するこのヒューマニズムが都市ブルジョワ文学の中でのテーマとなったものが、ここで言うところのインディヘニスモ文学である。

20世紀に入ると、インディヘニスモの思想と実践は時代の要請から、近代国家の建設という国民的テーマとしてのナショナリズムの議論の中に組み込まれていく。メキシコではメキシコ革命後、革命文学<sup>3</sup>のサブジャンルとしてインディヘニスモの文学作品が多数書かれることとなった。また、ペルーではいかに革命を起こし、新たな国家を建設していくかという観点から共産主義的思想に共鳴する者たちによってインディヘニスモ文学が書かれた。いずれの場合でも、植民地的な社会構造を変えようとする思考によって、先住民をめぐる議論は、支配される者は善、支配・搾取する者は悪という二元論的な図式の中に埋め込まれる (Fuentes 1980, p.14)。つまり、インディヘニスモ文学にはかつてのインディアニスモ文学のように先住民の社会や文化を可能な限り美化しようとする視点が含まれる。たとえば、作品のタイトルが今日ユカタン半島を表すメタファーとしてしばしば用いられる程、国民的価値を与えられることになったアントニオ・メディス・ボリオの『雉と鹿の大地』 (*La tierra del faisán y del venado*, 1922) という作品では、外国人にとってロマン化された先住民マヤの伝統文化が描かれるだけで、搾取に喘ぐ先住民の姿は一切描かれない。同時代を生きる先住民を救済するという政治的・社会的命題は先住民の伝統文化の国民文化への読み替えによって、先住民の存在そのものが消去されたのである。実際、メキシコの革命政権は先住民の国家への文化的統合によって先住民問題の解決を図ろうとした。

文学的技法の観点から見たとき、インディヘニスモ文学は、ラマが言う意味での「都市」の外周世界を表象するに当たって、そこを口承 (orality) によって記憶が継承される世界とみなし、そこに暮らす人々の「声」を作品の中に救い上げようとした。オーストリア人の批評家マーティン・リーンハートが喝破しているように、口承の中から拾い上げられた声は、それを拾い上げ文字化した人のフィルターを必ず通っているという点においてもはや真正なる声ではない。それは先住民の「声」を表象するために行われた文学的技法に過ぎない<sup>4</sup>。その意味で、リーンハートは先住民の社会文化を美化して描く文学を「エスノフィクション (etnoficción)」と呼んでいる (Lienhard 1990)。上述のアントニオ・メディス・ボリオの『雉と鹿の大地』も先住民と暮らした経験とそこで身につけた先住民言語の知識をもとに、メディス・ボリオが自らの内に内化した先住民文化を描いている点において、それはまさにそうしたエスノフィクションの一つである。

もともと、民俗的要素を表す記号として粗野な「話し」言葉を引用するコストゥンプリスモ (costumbrismo) 的な作品から、民俗性を偽装したエキゾチックな語りを普遍的な美の形式にまで押し上げたグアテマラのノーベル文学賞作家ミゲル・アンヘル・アストゥリアスの作品に至るまで、文学的効果を狙った「先住民の声」の利用方法は多岐にわたる。だが、インディヘニスモ文学の場合は先住民の表象が重要な位置を占めるだけに、先住民の真の「声」を作品の中にどれだけ忠実に反映させるかが極めて大きな問題となる。特に、先住民ではない作家が先住民を代弁する形式をとる限りにおいて、この問題は人類学における民族誌と同様のジレンマを抱え込む。最も単純な(ただし、ナイーブな)解決方法は先住民文化理解の精度を極限にまで推し進め、文学者自らが先住民になりきることである。メキシコではメディス・ボリオは元より、『バルン・カナン』(Balún Canán, 1957)や『テネブレ』(Oficio de tinieblas, 1962)などチアパス州の先住民を描いたロサリオ・カステジャーノスが幼少時から先住民に囲まれて生活したことを「声」の真正性の拠り所とした。また、ペルーではホセ・マリア・アルゲダスが幼少時にやはり同様に先住民と生活を共にした結果、ケチュア語のほぼ完璧なネイティブ話者になっただけでなく、先住民の心性を身に付けたことで、先住民文化の表象の可能性を広げたことは文学史において常に特筆されることである。

いずれの場合にせよ、先住民の復権という社会的正義を掲げるインディヘニスモ文学において、実際に声を発するのは先住民自身ではなかった。ホセ・カルロス・マリアテギが『ペルーの現実解釈のための七試論』(1929)でいみじくも自己分析しているように、インディヘニスモ文学はメスティソ(混血)の文学なのであり、先住民の手による文学ではない。インディヘニスモ文学は元来、こうした先住民表象の限界を内在させていたのであり、ラテンアメリカ文学ブームが生まれなくとも、いずれは文学的な表現の限界に突き当たる運命にあったはずである。先住民の「声」を文学的に表象することにおいて、非先住民(白人およびメスティソ)はそのスペースをいずれは先住民自身に明け渡さねばならなかったと言えるのかもしれない。だが、それは先住民ではない者が先住民について語る事が不可能であることを意味しない。むしろ、文学そのものが、そこで語られる先住民とは誰なのか、何のために先住民について語るのか、また先住民について語る権利は誰にあるのかといった問題を議論するための政治的アリーナと化することになる<sup>5</sup>。したがって、ラテンアメリカ文学のブーム登場以前に存在した、各国の先住民問題を扱ういわゆるローカルなインディヘニスモ文学は消滅しても、先住民(性)を誰がどのように語るか、あるいは語る声を持たないサバルタンとしての先住民に如何に語らせるかといったイデオロギー的な論争として、インディヘニスモの思想的・文学的伝統は継続していくのである。

ここで議論をメキシコだけに限定するならば、先住民表象の精度を高める選択肢は文学ではなく文化人類学や社会学などの学術研究に完全に委ねられてしまう<sup>6</sup>。それによって、先住民表象における真正性の制約を解かれた文学は「声」のフィクション性・神秘性を推し進めていく。たとえば、カルロス・フエンテスは『澄み渡る大地』(La región más transparente, 1958)において、全能者の如く様々な場面と人々を繋いで回る先住民イスカ・シエンフエゴスの語りをを用いて、先住民をメキシコ人の存在そのものを規定する根源的な地位へと追いやってしまう。先住民はその存在を問うべきものではなく、むしろメキシコ人にとってはそこにある、あるいは常に思い出さねばならない「深淵なる」ものとなる。それはメキシコ人が決して失ってはならない「もの」であり、記憶し、常に思い起こすべき対象となってしまうのである。

そもそも革命後のメキシコにおいては新たな国家建設のモデルとしてメスティソ(文化的混血)

が称揚されていた。メキシコ人アイデンティティの追求と結びついたこのメスティソ思想はまさに文学がその想像力を働かせるのに恰好の材料を提供した。また、多くの作家、さらにはラテンアメリカ文学ブームを支えた読者は、植民地的状況下で苦しみ続ける先住民あるいは伝統と近代の狭間で葛藤する先住民の姿ではなく、むしろ混血が生み出す未知なる可能性とその神秘性に思いを馳せていったのだとも言えよう。それゆえ、混血のプロセスさえとっくの昔に通り過ぎたメキシコの一地方の村コマラにおいてメキシコという制度を生きる個々人の内面的葛藤を描いたフアン・ルルフォの『ペドロ・パラモ』(Pedro Páramo, 1955)は、登場人物が用いる訛りのある言葉使いの中に混血の歴史を封印し、その混血たちの「ささめき」だけが生きる神話的な世界を創出しているがゆえに<sup>7</sup>、読者はコマラという架空のトポスの中で先住民の歴史に思いを馳せることができるのである。

メキシコの作家は、パルーのインディヘニスモ作家ホセ・マリア・アルゲダスがあくまで先住民性にこだわり続けたのとは対照的に、メスティソであることを逆手にとって、アルゲダスが陥った社会学・存在論的アポリアを解消したのだとも言えよう<sup>8</sup>。本来インディヘニスモ文学は先住民だけを語るための文学ではなく、語り手が属す社会全体について議論するための文学であった。フアン・ルルフォやカルロス・フエンテスも先住民をその作品世界に内包しているという点において、彼らもインディヘニスモの文学を実践している。だが、彼らはメスティソあるいはメキシコ人の名の下に、現代を生きる先住民たちから再びその「声」を奪い取ってしまったのだ。その意味で、メキシコにおいて先住民が自らの声をあげるのは社会的にも文学的にも歴史的な必然であった。そして、世界レベルでの多文化主義の台頭によって、メキシコでも先住民たちが発言するスペースが開かれたとき、先住民たちはこぞって自らの言語で文学作品を発表するようになったのである。では彼らは現在どのような文学を企図しているのだろうか。

## 2 先住民作家は何を書くべきか

### 2.1 多文化主義における民族の領有

今日の先住民作家の多くは、文学の実践を、自分たちの言葉を取り戻す作業とみなしている。メキシコの先住民は革命後の国家によるインディヘニスモ政策の下でさえ、メキシコ国民として西洋型のグローバルな文化を基調とする国民文化への同化を強いられてきた。学校教育のみならず、スペイン語を公用語とする社会システムの中で、先住民はスペイン語の使用を余儀なくされ、先住民言語によるコミュニケーションの場とその習得の動機づけを奪われてきたのである(詳細は拙稿2011参照)。それゆえ、先住民言語で書くことは、個人レベルではスペイン語を使っていなければ得られたであろう先住民言語を用いた自らの人生を書き直すことを意味し、失われたものへの郷愁として立ち現れる。だが、それは社会集団レベルに位置づけられたとき、先住民言語でコミュニケーションが成り立つ社会システムの再創出を意味する。それゆえ、先住民文学は言語集団としての民族の復権に寄与するものでなければならないと考える先住民知識人は少なくない。たとえば、詩人でもあるオアハカ州マサテコ語話者の文学者フアン・グレゴリオ・レヒノは先住民作家の社会的役割について次のように主張する。

先住民の作家や研究者の間には、自分たちの役割は自分たち先住民が抱える問題を共同で分析し、先住民の生活条件を改善するのに資するような要素を先住民文化にもたらすことであるという暗黙の了解が存在する。(中略) 新たな作家たちは民族の復権を実現するための闘

いを続ける中で、先住民の文化に新しい要素を付け加えるという役割を自らに引き受けているのである。(Regino 1993, p.126)

これは表向きの建前論かもしれないが、多くの先住民作家は自らの文学活動を正当化するために、こうした民族への貢献という言説を用いる傾向にある<sup>9</sup>。「自分が書きたいから書いている」とか「言葉で何かを表現したい」といった作家としての個人的な文学的欲求は先住民社会内部向けの説明としてはあまり説得力を持たないのだ。では、先住民作家は一体何を書けばよいのだろうか。先住民文学だからと言って、扱うべきテーマや内容に関して特別な制限があるわけではない。ただ、先住民的価値に根差したものを書くべきであるという暗黙の了解が先住民作家たちの間には存在する。

しかし、先住民の価値観に根差したものが具体的には何を指すのか、何をもってして先住民の価値観に根差していると言えるのか。それに対する答えは先住民作家の間でも決して合意があるわけではない。そもそもメキシコにおいては、先住民の価値観だけでなく、先住民であることすら実は自明なことではない。先住民とは本来支配者たる白人とは異なる文化を持った人の総称であり、西洋文化の欠如が先住民であることを決定するための指標となる。それゆえ、先住民はサイドがいうところのオリエントにはかならない。そして、多文化主義的イデオロギーの下、そのオリエントたる人々に声を発する機会が与えられることとなったのだ。ここで、彼らが置かれたサバルタンの状況は度外視したとしても、先住民が先住民言語を使って、あるいはその言語的概念に基いて自らの声を他者に理解してもらうことはできない。つまり、声を発したことにはならない。そうなると、彼らは「西洋」の概念を用いて自らを表現しなければならないことになる。

その場合、先住民による語りにどれだけ「真性の」あるいは「本来の」先住民的要素が含まれているかは重要ではない。多文化主義の下では文化的集団であるとア priori にみなされた人々が自らの文化的アイデンティティを主張することが重要なのだ。さらに言えば、そうした文化的アイデンティティの語りの中に先住民固有の世界が構想される。ナワトル語作家のナタリオ・エルナンデスが先住民文学のあるべき姿について述べた次の言葉は、そうした多文化主義に対する愚直なまでの期待が込められているはずだ。

私が思うに、先住民文学は我々民族の基本的な価値観に根差し、そこから展開しているのだから、先住民族が新しい世紀に向けて持つべき新しいモデルや新しいビジョンを作り出す上で、何らかの貢献ができるはずだ。(Hernández 1993, p.115)

だが、現在の先住民によるこうした語りの多くは、メキシコ社会が用意する先住民イメージの消費という欲望の鑄型に流し込まれ成形される点を無視するわけにはいかない。サパティスタ民族解放軍 (EZLN) を指揮する副司令官マルコスがアントニオ老人の名を借りて、武装蜂起の起源神話を語ろうとしたことをここで思い起こす必要があるだろう (小林 2004)。副司令官マルコスはメキシコ社会が期待する、自然と調和して暮らす先住民というイメージを用いて武装蜂起した先住民を描いたのである (Sans Jara 2009, p.274)。こうした先住民表象はサパティスタを支援するメキシコ人や外国人だけでなく、先住民作家でさえも好んで用いるものである。それは、そうしたイメージを再生することが自分たちの発言を理解してもらうための手っ取り早い方法であるし、また説得力を持つからである。レイ・チョウ (1993) の言葉を借りれば、それは「自動化」

された先住民言説だからである。

先住民言語で書かれた作品には作家自身が翻訳したスペイン語の対訳が必ずつけられるが、特にそのスペイン語訳にはその「自動化」の傾向が強いはずである。スペイン語訳はメキシコで使われているスペイン語の語彙や表現が持つ意味領域とそれが用いられる社会的コンテクストを考慮した上で、作家がメキシコ人向けに書き直したテキストであると言っても過言ではない。つまり、まず最初に先住民言語で書き起こされたものではあっても、スペイン語に翻訳される過程で、先住民的要素は必要に応じて捨象され変形される。あるいは、そもそも書くべき先住民的要素は先住民作家によって取捨選択されていると言ってもいいかもしれない。したがって、非先住民社会の社会的文化的枠組みに合致する形での先住民文化の表象は、プラット（1992）が「コンタクト・ゾーン」と呼んだ植民地の支配者の言説が被支配者の主体性と出会う場所において、被支配者が植民地支配者側の欲望そのものを自己領有するプロセスに他ならない。すなわち、先住民作家たちは自分たちの文化の特異性を主張するために、他者が作り上げた他者表象あるいはその用語を用いることによって自らの自画像を描いている。少なくとも取りあえずはそうせざるを得ないのだ。

## 2.2 本質主義的な語り

したがって、多文化主義の下で所与のものとして想定される先住民文化に依拠しつつ、それを構成する語彙や概念を使って、先住民性を自己言及的に語るのが今日の先住民文学の基本的作法である。それはもしかしたら西洋的な視点からは見過ごされてきた先住民文化の価値を見出すことに繋がるかもしれない。場合によっては西洋的なものの見方そのものに変革を迫るようなアンチテーゼになるかもしれない。だが一方で、先住民作家の作品が先住民の伝統的な文化に根差していなければならないというイデオロギーは時として先住民社会の伝統が内包する様々な問題を等閑視することにも繋がる。先住民社会にもジェンダーのような社会的文化的な差別／抑圧の問題が存在する。それゆえ、先住民女性に対する差別／抑圧を作品の中心的なテーマに据えようとする作家は、男性性を中心に美化された先住民文化だけを本質主義的に語ろうとする先住民作家仲間と対立することになる。実際に、差別や抑圧を経験してきた先住民女性としての立場から小説を書こうとするユカタン・マヤ語話者の女性作家ソル・ケー・モオ<sup>10</sup>は、あるインタビューの中でそうした対立について次のように述懐している。

ユカタン州の先住民作家たちから私はこんなことを言われたことがあります。私たちはマヤという民族の伝統を飛び越えることなどできないし、私たちとはかかわりのないモデルを使って民族の規範を壊すようなことをしてはいけないんだ、と。でも、その規範というのは、その人たちだけに見えるものでしょ。だから、私は言ってやったんです。あなたたちは私が女であり、作家であることをどのようにお考えなのですか。私にあなたたちと同じような作家になれとおっしゃるのですか。それとも、あなたたちと同じレベルの作家にすらなっていないのですか。私はあなたたちの助言なんて必要ありません。自分が何をすべきなのか私は分かっているつもりです。そう言ったら、大変なことになったんですよ。先住民作家の市民団体を立ち上げて私だけ呼ばれないんです。ソルは自分たちとは違うから入れるなってことなんです。ソルは先住民作家が持つべき思想や果たすべき役割に背を向けるんですって」（“Primera novela en Maya - Literatura indígena”, 2009年6月30日公開, <http://>

www.youtube.com/watch?v=OcyYa5-YltM, 2017年10月4日最終アクセス)

ソル・ケー・モオがこう述べる時、彼女は単にマヤ先住民社会に存在するジェンダー差別だけを問題視しているわけではない。むしろ彼女にとって、先住民性しかも本質化された先住民文化を書くことは自分の文学を縛ることでしかない。彼女にとって先住民であること、すなわちマヤ語話者であることは創作活動の一つの条件にはなり得ても、それによって先住民性を語ることは必ずしも主たる目的とはならない。彼女はマヤ語という先住民言語を使って、すなわちマヤ語を母語とする一人の女性として、小説というジャンルの文学作品を書きただけなのだ。テーマを先住民の伝統的な文化だけに限定する必要など全くない。それは日本人が日本語で、スペイン人がスペイン語で小説を書くのと何ら変わるものがない同じ行為だ。彼女はしばしばそのことを、自分はノーベル文学賞を目指して書いている、という言葉で表現する。先住民であることはそれだけではノーベル文学賞受賞の理由にはならない。ノーベル賞を受賞するためには、あくまで人類に普遍的な変革の価値をもたらす文学作品でなければならない。その意味ではケー・モオがノーベル賞を目標に掲げるとき、自分にはそうした作品を生み出す能力があると言っているのではなく、むしろ先住民作家も先住民という枠を超えて普遍的な文学作品を書くことができることを仲間の先住民作家たち、さらには世界の人々に向かって訴えているのだ。彼女は本質主義的な先住民の文学というカテゴリーの呪縛からの解放を訴えているのである。

### 3 先住民文学とポストモダニズム

前節においては先住民が構想する先住民文学のあり方について、彼らの文学作品の分析からではなく、インタビューなど彼ら自身の説明から考察した。では、彼らの文学作品はメキシコ社会において実際にはどのような評価を受けているのであろうか。前節の最後に紹介したソル・ケー・モオは西洋とは異なる論理を持った民族・文化の文学という文学的枠組みそのものを打ち破る必要性を訴える数少ない、極めて先進的な先住民作家の一人である。文学批評の観点から言えば、彼女の文学はその眼差しが先住民文化だけに閉じこもることなく、グローバルな世界に向いているという意味でコスモポリタンであると言えるかもしれない。あるいは先住民の文化的伝統の歴史性にメスを入れるという意味においてポストモダンな文学と言ってもいいかもしれない。だが、先住民文学がそうした評価を受け、グローバルな文学として先住民以外の読者に読んでもらうためには、そもそも先住民文学がグローバルな文学であることを「発見」してもらう必要がある。だが実際には、先住民文学は西洋の側のオリエンタリスト的文学批評あるいは眼差しによって西洋の文学から切断されたままである。先住民文学の場合、作品自体はポストモダンであっても、残念ながら即座に誰にでも読んでもらえるわけでない。まずは一般読者の目に留まり、実際に手に取ってもらわなければ話にならない。たとえば、メキシコのユカタン文学サークルのある会員が同サークルのブログにアップロードした次の記事は、西洋の側の文学者および読者が先住民文学に対して依然としてある種の先入観を持っていて、それによって彼らの目が先住民文学には向かないことを如実に示している。

私はこれまで先住民文学をほとんど読んでこなかったが、読んだことのあるものはどれもがっかりさせるものばかりだった。先住民文学は自分たちがマージナルな存在であるというスタンスを崩さず、自分たちの伝統を守ることだけに心を奪われている。そこには文学



のあやも新しい解決を生み出す文学的想像力もない。（“Apuntes sobre un parte-aguas” <http://redliterariadelsureste.blogspot.jp/2008/11/apuntes-sobre-un-parte-aguas.html>, 2017年10月4日最終アクセス）

このブログは、ソル・ケー・モオの『母テヤの心』の出版セレモニーに出席したある会員が「ある分水嶺についてのメモ」と題して投稿したものである。同会員はソル・ケー・モオの作品に触れる前には、先住民文学に関して上に引用したようなイメージしか持っていなかったことを白状した上で、実際にその作品についての解説を聞き、ソル・ケー・モオが作品の一節を読むのを耳にした時に受けたある衝撃について報告している。同会員はブログの最後でその衝撃を次のように書いている。

その夜の最高の瞬間はソルがマヤ語で書いた小説の一部を読み上げた時にやって来た。サロンが震撼した。その場に居合わせた中でマヤ語のできる者はほとんどいなかったが、彼女が読み上げるテキストの持つ音楽性で我々はまるで催眠術にかかったかのようなようだった。ソルはまるで歌を歌っているかのようなようだった。最後にカルロス・マルティンが同じテキストのスペイン語訳を読み上げた。もはや明らかだった。『母テヤの心』は我々が読むべき小説だ。マヤ語話者の女性が初めて書いた小説だからではない。彼女の作品にはどうやら、私が講演で聞いた範囲でのことではあるが、学ぶべきことがたくさんあるからだ。（Ibid.）

彼はコスモポリタニズムやモダニズムといった用語は使わない。むしろ、普段は西洋文学しか読まず、先住民言語も分からない作家や読者であっても、彼女の作品は読むに値する、その事実を発見した時の衝撃を、彼はマヤ語の響きの持つ音楽性に託して作家仲間には伝えようとしている。この場合の音楽性はソルが話したマヤ語の口調や音色などの美しさを言ったものではないだろう。彼は普段違和感に満ちた雑音でしかない先住民言語の中に、その言語で書かれたテキストにも自分にとっても意味のある世界が存在することを発見したことで、それを読み上げるマヤ語が心地よいものに聞こえたことを音楽性という言葉で表現しているのだ。

先住民文学が西洋の文学に接続するとはまさに、このブログの投稿者の場合がそうであるように、西洋の読者に感動をもって読んでもらえるようになることであるはずだ。もちろん、この場合の感動とは同書を読んでみたいという欲望を他の読者にも抱かせることの謂いに他ならない。読んでみたいという欲望が、誰かの意志によって作られ操作され得る資本主義の商品であるがゆえに、商品を作り出す側の出版社や文学者、さらには作家たちは一体となって、常に新しいスタイルやテーマを生み出し、消費者たる読者の欲望を喚起し続ける。その意味で、先住民文学というジャンルが先住民という異文化に関する文学的言説であり続ける限り、西洋の読者の欲望を引き付ける力は限定的だろう。自分たちの作品がグローバルな世界で受け入れられることを望むのならば、先住民作家は先住民でない人たちの関心をも視野に入れた新しいスタイルの語りを模索しなければならないはずである。また、ラテンアメリカの文学は常に革命を志向するというカルロス・フエンテスの弁に従うならば、出版社や文学者（文芸評論家）たちも先住民作家と一体となって、その新たな語りを生み出す努力をしなければならないはずである。フエンテスは『ラテンアメリカの新しい小説』の最後にそうした努力の方向性について次のように述べている。

私たちラテンアメリカの人間が自分たちに固有の進歩のモデルを自分たちで作ろうと思うなら、自分たちの言語こそが、それに形を与えたり、目標を定めたり、優先順位を決定したり、新しい生活のスタイルの構築したりする上での唯一の手段となる。つまり、それ以外の方法では決して言えないことを言えるようになることである。(Fuentes 1980, p.98)。

フエンテスはこの文章を書いた時、自分たちの言語の中に先住民言語を含めていなかったかもしれない。しかし、メキシコが多文化国家であることを憲法で規定して以降、先住民言語はメキシコ人であることに制限を設けるものではなくなった。むしろ、先住民言語はメキシコを上げる上での新たな資源となった。先住民言語が生み出す文学的想像力にメキシコ人全員が耳を傾けると、メキシコには新しい驚きが待っているのかもしれない。それは「西洋」の読者にも同様に言えることだ。

### おわりに

本稿では1980年代から活発化してきたメキシコにおける先住民文学についてそれが登場してきた歴史的背景を概略するとともに、現在の先住民文学を取り巻く状況について先住民の立場から考察してきた。それが極めて楽観的な議論であった点は否めない。それは筆者個人のものの方によるかもしれないが、一方で多文化主義に対してメキシコの人たちが抱いている期待の大きさを反映したものでもある。メキシコでは多文化主義的な思想の登場以来、先住民による語りそのものに対して疑義を挟むような態度は公の場ではタブー視されるようになった。先住民のアイデンティティに関わる先住民自身の語りを絶対視するこうした社会的・思想的風潮が、今日の先住民文学に対する先住民たち自身の楽観的な期待を支えているのだ。それゆえ、先住民文学の作家たちからサバルタンとしての挫折感や閉塞感を嘆く声はほとんど聞かれない。むしろ、彼らは先住民言語で文学作品を書くことを秘義的かつ特権的なものとみなし、西洋の文学に対する自らの文学の優位性を誇っているかのようですらある。それを示す一つのエピソードを紹介しよう。

先住民文学はスペイン語訳のついたバイリンガル版で出版されるにも関わらず、先住民言語で書かれねばならないという社会的通念がメキシコだけでなく、ラテンアメリカ全体に存在する。そこで筆者は、ユカタン・マヤ語の先住民作家たちが行なったあるシンポジウムにおいて、先住民がスペイン語だけで文学作品を書いた場合、それは先住民文学と言えるかどうかと先住民作家たちに問いかけた。すると、彼らはその問いに対する直接的な回答を避けつつ、先住民言語の中にこそ先住民の精神が宿っているのであり、自分たちはその精神を伝えるために文学作品を書いているのだから、先住民文学はまずは先住民言語で考え、先住民言語で書かれねばならないのだと異口同音に答えた。

どんな言語であっても言語はそれぞれに唯一無二の固有の価値を内在させているという点において、先住民言語で作品を書くことが先住民作家としてのアイデンティティの大きな拠り所になっているという事実はあるだろう。だが、それ以上に、先住民言語の使用は先住民作家が自らの作品に対する先住民的価値を否定されることを回避するための最終手段として用いられていることを理解する必要がある。多くの先住民作家はスペイン語教育を受けた知的エリートであるという点において文化的には明らかに「混血」である。それゆえ、彼ら自身が混血として非先住民カテゴリーへパッシング（越境）することも、またパッシングを受けることも容易だ。スペイン

語だけで先住民の文化について書いた場合、そこにどれだけ先住民的要素が含まれていたとしても、白人やメスティソが書いたインディヘニスモ文学から区別することは困難となる。それゆえに、先住民作家が先住民として先住民文学を書くためには、反駁不可能な、不可侵の領域としての先住民言語に依拠せざるを得ないのだ。

アシュクロフト等（1998）は今日のポストコロニアルな文学には、前植民地時代の文化を唱える理論と混合性を不可避かつみのり豊かな特性と捉える二つの立場の間での論争があると言う。ところが、メキシコの先住民文学に関しては、現時点では後者の立場をとる作家はほとんどいない。それは先住民言語の使用によって彼らの語りが本質化され、語りの持つ虚構性が覆い隠されてしまっているからではないだろうか。そうだとすれば、使用される先住民言語あるいは先住民文化に内在する植民地主義の刻印が可視化され顕在化したとき、アシュクロフト等の言うもう一つの立場が初めて必要になってくるのだろう。

## 引用文献

- アシュクロフト, ビル, ガレス・グリフィス, ヘレン・ティフィン. 1998. 『ポストコロニアルの文学』 木村茂雄訳, 青土社.
- Barthes, Roland. 1968. "L'effet du réel", *Communications*, 11: 84-90.
- Cornejo Polar, A. 1984. "Sobre el 'neoindigenismo' y las novelas de Manuel Scorza." *Revista Iberoamericana*, 50 (127): 549-557.
- Figueroa, Miguel. 2005. "Palabras olvidadas, letras borradas. La literatura de los pueblos indígenas de México", *Cuadernos del Minotauro*, 1: 67-78.
- Fuentes, Carlos. 1980 [1969]. *La novela hispanoamericana*. México, Editorial Joaquín Mortiz.
- Góngora Alfaro, Luz María. 2005. "El significado social de la poesía de Antonio Mediz Bolio", *Revista de la Universidad Autónoma de Yucatán*. 234.
- Hernández, Natalio. 1993. "La formación del escritor indígena" en Carlos Montemayor (coord.) *Situación actual y perspectivas de la literatura en lenguas indígenas*, México, Consejo Nacional para la Cultura y las Artes, pp.103-117.
- 小林致広 2004. 『「老アントニオのお話」を読む』神戸市外国語大学研究叢書第37冊、神戸市外国語大学外国学研究所.
- Leines Mejía, Armando. 2003. "Novela indigenista: Retrospectiva, simplismo y significación", *Temas y variaciones*. 20: 405-424.
- Lienhard, Martin. 1990. *La voz y su huella: Escritura y conflicto étnico-social en América Latina (1492-1988)*. La Habana, Casa de las Américas.
- マリアテギ, ホセ・カルロス. 1988. 『ペルーの現実解釈のための七試論』原田金一郎訳, 柘植書房 (José Carlos Mariategui. 1928. *Siete ensayos de interpretación de la realidad peruana*. Santiago, Editorial Universitaria)
- Ortega Arango, Oscar. 2012. "El viaje iniciático del autor. Secretos del abuelo de Jorge Miguel Cocom Pech", *Semiosis*. Tercera época. Vol.VII, núm. 15, pp.23-36.
- Pratt, Mary Louise. 1992. *Imperial Eyes: Travel Writing and Transculturation*. London, Routledge.
- Rama, Angel. 1984. *La ciudad letrada*. Hanover, Ediciones del Norte.
- Regino, Juan Gregorio. 1993. "Escritores en lenguas indígenas", en Carlos Montemayor (coord.) *Situación actual y perspectivas de la literatura en lenguas indígenas*, México, Consejo Nacional para la Cultura y las Artes, pp.119-137.
- レイ・チョウ. 1998. 『ディアスポラの知識人』本橋哲也訳, 青土社. (Rey Chow. 1993. *Writing Diaspora: Tactics of Intervention in Contemporary Cultural Studies*.)
- ロサルド, レナート 1988. 『文化と真実: 社会分析の再構築』椎名美智訳, 日本エディタースクール出版部.
- Sans Jara, Eva. 2009 "La crisis del indigenismo clásico y el surgimiento de un nuevo paradigma sobre la población indígena de México", *Revista Computense de Historia de America*, vol.35, pp. 257-281.
- 吉田栄人 2011. 「メキシコ国ユカタン州におけるマヤ語復興活動—日常的実践におけるマヤ語の再領土化をめぐる

て」吉田栄人編著『日常の実践におけるマヤ言説の再領土化』（科研報告書）207-253頁．

## 注

- 1 先住民による執筆活動すなわち先住民言語による現代的なテキスト作成は元を辿れば必ずしも文学的創作として始まった訳ではない。むしろ、先住民の識字化の一環として始まった。また、その識字化は民族的意識の活性化という政治的意図の下に行われたものであった。それゆえ、初期的段階においては口頭伝承などの集団的記憶すなわち第三者の作品を聞き取り、それを文字化することがテキスト作成の主たる作業だった。
- 2 2002年に先住民言語権利法が制定され、さらにそれに基づいて翌2003年にINALI（メキシコ先住民言語庁）が設立された。
- 3 いわゆる革命文学はメキシコ革命をテーマとする文学の総称である。主に革命の戦闘シーンを描く中で、革命の意義や目的を語ることから始まった。しかし、メキシコ革命そのものが政治的論争の対象であったため、革命文学には多様なテーマと題材が含まれる。
- 4 文学において声（orality）は単に実際の発話を転写したものではなく、むしろ、ロラン・バルト（1968）が「現実効果」と呼ぶ、発話であることを匂わせる文学的表現として再現される。
- 5 先住民に語らせる一つの文学的手法として先住民自身の証言に基づいた物語の復元という手法が存在する。メキシコのマヤ先住民の半生を再構成したりカルド・ポサスの『フアン・ペレス・ホロテ』（1952）やボリビアの鉱山労働者の闘いを語った『私にも話させて』（1977）、グアテマラにおける先住民の虐殺を告発した『私の名前はリゴベルタ・メンチュウ』（1985）など。ただし、こうした証言は西洋の文学的技術に通じた第三者（通常は白人）によって編集されているという点でエスノフィクションの一種であるという誹りを免れない。
- 6 真正性を追求する民族誌学的な表象も民族誌学者の認識と記憶のフィルターを介して再構成された語りである点において究極のフィクションともなりうる点に注意しておかねばならない。
- 7 『ベドロ・パラモ』ではものを売りに山間部からやってくる先住民が描かれているが、彼らは混血としてのコマラ（メキシコ）の外部に位置づけられた存在である。山間部に暮らす先住民の描写は、メキシコ人作家たちがメスティソをめぐる議論において、現実の社会から隔絶して暮らす先住民と混血という形で社会に統合されてしまった先住民とを区別して考えていたからなのかもしれない。実際、メスティソ思想のメキシコ社会への浸透は先住民の存在を人々の意識から消し去るものであった。それゆえに、今日の先住民文学ルネッサンスはメキシコ社会から隔絶してしまった先住民たちではなく、むしろメスティソとして「消されていた」先住民たちによる自らのアイデンティティの回復をめざすものなのである。
- 8 アルゲダスはメスティソ（チョロ）化する先住民の生き様を描こうとする『上の狐と下の狐』（1970）において、自らのアイデンティティのよりどころである先住民性の着地点を見いだせない失意の内に自殺を図った。
- 9 オルテガ・アランゴは、共同体に根ざした先住民性をアピールすることが自らの作品を出版してもらうために、現在の先住民作家が取り得る最善の戦略なのだと言う（2012, p.26）。
- 10 ソル・ケー・モオはユカタン州 Calotmul 村生まれ（1968年）のユカタン・マヤ語を母語とする女性作家。初期の作品はソル（Sol）ではなく、Marisol という名前で出版されている。1970年代にユカタン州において労働組合運動を支援した弁護士「チャラス」ことエフライン・カルデロン・ララの暗殺を扱った彼女の処女作『母テヤの気持ち』（*X-Teya, u puxsi'tik'al ko'olel/ Teya, un corazón de mujer*; 2008）は先住民女性が先住民言語で書いた初の小説として話題になった。すでに数々の文学賞を受賞しているが、中でも2015年には『女であるだけで』によって、メキシコにおいて先住民文学として最も権威あるネサワルコヨトル文学賞を受賞している。